

虹

にじ

外国人支える「ママ」

②② 湯川ルシレーネさんの30年



子どもや孫に囲まれ、笑顔を見せる湯川さん（手前中央）

3歳の娘が熱を出した。娘を抱いて、病院に向かった。

「 Netz、Netz」。病状をジェスチャーを交えて伝えようとした。その様子がおかしかったのか分からないが、病院の医師やスタッフが笑い出した。

「『なんで笑ってる?』と聞きたかったけど、日本語が出てこなかった」。湯川ルシレーネさん(57)＝高岡市＝は、30年余りに母国のブラジルから日本に移り住んだ当時を振り返る。怒りが込み上げたが、ポルトガル語を訳す辞書を見せながら伝えるしかなかった。

現在のように、翻訳してくれるスマートフォンはない。頼りにできる人も近くにいない。「あの頃、厳しかったね。ブラジルに帰りたいと思うことが結構あった」

もともと数年働いてブラジルに戻るつもりで来日したが、人生の半分以上を日本で暮らす。言葉の壁に苦しみながらも、会社を立ち上げて、働く外国人をサポートし、学童施設やサッカー教室などを設立。4人の子どもを育ててきた。

◇

湯川さんは、ブラジルのサンパウロでサトウキビ農園を営む家に生まれた。地元の大学に進み、英語などを学んだ。20歳で日系2世の男性と結婚。湯川は夫の名字だ。長女を出産し、高校の英語教師をしていた。

当時、ブラジルは不景気が長期化していた。一方、日本はバブル景気で製造業などの人手が不足。1990年の入管難民法改正で、3世までの日系人と家族が定住して働けるようになり、多くの人が海を渡った。

日本の給料はブラジルの6倍くらいとされた。湯川さん夫妻は日本で3～4年働いてブラジルに戻れば、家や車が買えると考え、日本で働くことを決めた。お金を早くためるため、愛知の会社などよりも残業が多くできる富山の会社を選んだ。

92年7月、夫妻は幼い長女と共に飛行機で来日。南半球のブラジルが冬だったので、日本は暑く感じた。湯川さんは木材会社に派遣され、木材を選別して運ぶ力仕事を任せられた。職場の人から日本語を勉強するように言われたが、教わる場はなく、独学するしかない。だが、仕事と子育てに追われ、時間的な余裕は少なかった。

長女は保育園に入れたものの、開園時間以外に面倒をみってくれる人がいないのが悩

みだった。支えてくれたのが、保育園で朝の時間帯にアルバイトをしていた有沢^{ありさわ}亜弥子^{あやこ}さんだった。有沢さんは保育園の近くに自宅があり、迎えが遅くなる時などは長女の面倒をみてくれた。現在80歳となった有沢さんは「湯川さんの家族は明るくてね。国とか関係なく、自然と親しくなりました」と振り返る。

◇

来日して5年ほどたった頃、湯川さんは大学院で専門性の高い英語を学ぶため、家族でブラジルに戻った。母国で子育てしようと考えたが、不況が続き、治安も悪い。「やっぱり安全な日本の方がいい」と思い、卒業後に再び富山に戻った。

当時、外国人を派遣する会社には、英語を話すフィリピン出身者の登録が増えていた。湯川さんは食品工場で働く予定だったが、英語が使えるため、日本人との橋渡し



「寒のつち」 広田郁世

役として、派遣会社で働くことになった。

派遣の仕事に役立つ国家資格の衛生管理者試験を自費で受験。毎日午前3～4時まで勉強に励み、日本語の設問に苦戦しながら2回目の挑戦で合格した。

湯川さんは会社のルールに疑問を感じていた。外国人からの問い合わせに対応できるのは、業務時間内だけ。だが、外国人は仕事だけではなく、生活面に不安を抱えている。それは湯川さんが痛いほど分かっていた。「人材派遣会社が扱うのは物ではなく、人間」。湯川さんは外国人の気持ちに寄り添ったサービスをするため、独立して人材派遣会社を高岡市内に設立した。

「外人?」「社長が女?」。営業先で偏見の目で見られることがあった。アポイントメントを入れた会社を訪れたが、担当者

は名刺を受け取ろうともせず、追い返された。ある派遣先に外国人が病欠することを伝え、怒鳴りつけられ、駐車場に戻って車の中で涙したこともあった。だが、同じ日に別の会社から20人の派遣依頼が入り、「神様、ありがとう」と心から思った。

湯川さんの会社には、多い時で約400人の外国人が登録。2022年に外国人の子どもを預かる学童施設、24年には輸入食品店を高岡市内で開くなど、外国人が暮らしやすくなる事業を相次いで始めた。母の仕事をサポートし、今は幼い2児を育てる長女の小百合^{さゆり}さん(35)は「言葉が分からない国に来て、いろんなことに挑戦するのは、子どもの私から見てもすごい」と言う。

長男の勇治^{ゆうじ}さん(23)は母の勧めで行政書士となり、書類作成や手続きの面で外国人をサポートしている。「いつも忙しい母を見てきたから、『時間がない』と言い訳で

きない」と話す。

次男の信治^{しんじ}さん(21)はブラジルでプロサッカー選手として活躍。三男の秀樹^{ひでき}さん(16)は岐阜のサッカー強豪高校に進学した。

◇

湯川さんが新しく立ち上げた会社で運営しているのが、サッカー教室だ。

きっかけは、信治さんだった。小さな頃からサッカーがうまく、より高いレベルでサッカーを学べる場が地元で欲しいと思っていた。欧州や南米の有名チームのサッカースクールを開けないか調べてみると、金銭的に難しく、諦めかけていた。

だが、「神様」がほほ笑む。仕事でブラジルを訪れた際、セミナー会場の休憩所で、日本語で電話をしていた。すると、男性が

ら声をかけられた。日本にゆかりのある人のようだった。湯川さんはサッカー教室の夢を語ると、男性の父親も日本でスクールの立ち上げを考えているという。

父親の名前を聞くと、「ジーコ」と言われた。「本物のジーコ?」。湯川さんは驚いて聞き返した。男性は、元ブラジル代表選手で日本代表監督も務めたジーコさんの息子だった。しばらくして、ジーコさんから直接電話があり、夢が実現に向けて進んでいった。23年にジーコさんが監修した教室「ジーコ10・サッカースクール」が射水市で、さらに静岡県浜松市でも開講した。

外国にルーツを持つ子どもは学校でいじめられ、不登校になるケースがある。湯川さんの子どもも嫌がらせを受けた経験があった。「学校とは別にサッカースクールがあれば、サポートできる」と湯川さん。実際にサッカースクールでの活躍を機に、学校に通うようになった小学生もいたという。

◇

起業した人材派遣会社は24年にたたみ、事業を別の会社に引き継いだ。湯川さんはその会社の派遣事業部長として、今も変わらず外国人のサポートを続けている。

「ママ」。県内などで働く外国人たちは、湯川さんのことをそう呼ぶ。仕事や育児など経験が豊富で、母親のような頼れる存在だからだ。最近はビザの更新などの相談が増え、ひっきりなしに電話やメッセージが来る。外国人政策が厳格化されるという情報が流れ、不安になっているのだ。

日本人と外国人が分かり合うには何が必要なのか。湯川さんは言う。「みんな人間。心がある。おなかが痛いのも、つらいのも、外国人も日本人も一緒。だから、相手のことをもうちょっと考えなきゃならない」

湯川さんの夢の一つが、サッカーのトレーニングセンター。廃校した校舎を活用し、サッカーだけではなく、高齢者が体を動かせる場所にしたいと考えている。場所は県内の予定だ。「私、心は富山人ね。富山で好きなことにもっと力を入れたい」。実現には高い壁があることは分かっている。「難しいけど、私は簡単に諦めないから」

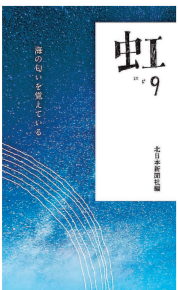
湯川さんの起業家としての原点になったのは、来日してから経験してきた苦労です。偏見を持つのも人間ならば、他人を思いやることのできるのも人間です。「心があるのは、みんな一緒」。湯川さんの言葉は心に響きます。

紙面提供／人と鉄のあいだに



OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作／北日本新聞社
メディアビジネス局



「虹」第9集 販売中

「虹」を書籍化しています。最新刊の第9集『虹 海の匂いを覚えている』は2022年9月から24年5月までに掲載した20編を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352（平日午前9時～午後5時）。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見・ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50
北日本新聞社西部本社「虹」係
FAX 0766-25-7773
mail niji@kitanippon.jp
次回掲載は3月1日(日)です。